

ご 挨 拶

土 岐 憲 三

立命館大学歴史都市防災研究所 教授

「安心・安全」という言葉を見たり、聞いたりする機会が最近増えているが、それは「地域の安全安心マップコンテスト」が始まった10年ほど前からではなからうか。このコンテストは、立命館大学歴史都市防災研究センター（当時）が文化遺産の防災問題を研究のテーマとしており、防災の主題は生命財産を各種の災害から守ることにあるから、子供が各種の災厄から自分を守ることの大切さを知り、実践能力を涵養してもらうために始めたのである。

小学生を主たる対象として、自分の近隣で起きる危険を察知する眼を養うために、夏休みに自宅や学校の周辺を見て回り、それを地図として表すことで客観視するとともに、他の人々に危険性を伝達する能力を向上させることに重点を置いたのである。この作業には子供だけではなく祖父母や父母との協力も許されている。

最初のころは、応募するのは近くの小学校の生徒が多かったが、こうした活動が知られるにつれて、遠方の学校からの応募が増えてきて、仙台や熊本の子供たちからの作品も届くようになった。

安心・安全という言葉に引きずられたのか、初めのころは学校への登下校の途上での交通事故の可能性や各種の危険個所などに関するものが多かったが、次第に視点が広く、高くなってゆき、洪水や地震災害を念頭に置いた作品が見られるようになった。すなわち、災害についての意識が防災問題の専門家のそれに次第に近づいてきており、これは子供たちがコンテスト自体を成長させていることを意味している。

コンテストの審査には、立命館大学のみならず他の大学の研究者にも加わって頂いて、応募作品のすべてを並べて選考している。制作に当たっては生徒の単名のものもあるが、グループによるものが多い。また、一つの小学校から多くの作品の応募がある場合もあり、こうした場合には担当の先生の存在が感じられ、指導者の重要性が理解される。多い年は応募が130作品に達している。

最優秀、優秀、佳作などの入賞作品には副賞が用意されているが、自転車やパソコンなど子供たちの好む物もあり、これらは関係する企業からの好意で提供されており、表彰式の際に表彰状とともに副賞として手渡される。表彰式には父兄も出席しているが、子供たちや家族の喜ぶ姿を見ると、この事業に携わる職員や教員の励みとなっている。